

特集

いま一度考えるゴミ問題

日本は高度経済成長期を経て、私たちのくらしを豊かで便利なものにしてきた。しかしその反面、大量生産システムを前提とした大量の商品が生産・流通・消費・廃棄される社会が形成されてきた。

大量に排出されるゴミに対処するため、各自治体でゴミの分別や回収の有料化が進められた。また事業者に対しては、容器包装リサイクル法や食品リサイクル法などの個別リサイクル法が整えられている。そして、2000年に循環型社会形成推進基本法が制定され、3R（リデュース、リユース、リサイクル）の考え方が重視されるようになった。

生協では、そうした法制度が整えられる以前から、牛乳パックやチラシの回収・リサイクル、レジ袋の削減やリターナブルビンの利用を社会に先駆けて実践してきた。

生協がこうした取り組みを時代に先駆けて取り組んでこられたのは、環境や社会に対する問題意識が高い組合員に支えられてきたからであろう。また、逆の見方をすれば、そうした組合員の期待に生協は答えてきたのである。

このような生協による率先した取り組

みや社会の動きは歓迎すべきである。しかし、今後の社会を展望する際、課題点も含まれているのではないだろうか。それは、現在議論されている循環型社会が、基本的には大量生産システムの経済社会を前提とし、それを少しずつ改善していく社会という意味での「循環型社会」である点である。つまり、大量にゴミが排出され続ける社会の仕組みを根本的に変えようという視点は含まれていない。

生協が目指す「循環型社会」はどうか。今までやってきたことを前提に、その延長線で考えていないか。例えば、チラシや食品容器のリサイクルは一所懸命に行うが、それらを使わない、あるいは減らしていくという発想はあるだろうか。

循環型社会の構築を考えていく上で、現代社会はどのような課題に直面しているのだろうか。本特集はゴミ問題を対象とし、ゴミの発生プロセスである川上（拡大生産者責任の問題）から、川中（市民によるゴミの分別の意義）、川下（ゴミの最終処理の問題）へ至るそれぞれの段階からゴミ問題を捉え直すことを狙いとしている。

（本誌編集委員 下門直人）

1. 「ゴミ減量・リサイクル」コスト負担のあり方をめぐって（原 強）
2. 改めて考える「ごみ分別の意義」～ 有害製品やごみ減量の視点も大切に（浅利 美鈴）
3. ごみ処理の実情と課題（金谷 健）